
白の皇帝 《エンペラー》

鷹崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の皇帝
エンペラー

【Nコード】

N0486Z

【作者名】

鷹崎 弘

【あらすじ】

魔術。

それは異世界人がこの世界に持って来たものである。

上代天馬は、そんな異世界人と出会い、魔術を知り、魔術学園に入学させられる。

月日が経ちそんな非日常が日常へと変わろする時、天馬は異世界人の知ってはいけないこと、親友の正体、さらに天馬すら知らない天馬自身のことを知ってしまう…そして……

学園異能ファンタジー、ここに開幕。

第1話（前書き）

いきなりですが、加筆修正しました。

今回は、少し評価をして欲しく、また、感想を聞きたかったので投稿しました。

きちんとした形で連載するのは年を明けてからになりますので、気に入ってくれた人はお気に入り登録以外にもお気に入りユーザーにも登録してください。

連載が近くなったら活動報告を書きますので。

第1話

世界とはたった一歩前に出るか出ないかだけで全てが変わってしまう。

そして今日、彼はそのことを真に知ることとなるのだった。

とある高校一年生の上代天馬^{かみしろてんま}は少し長めの黒い髪をなびかせながら深夜の街を全力疾走していた。

「やべえ…はあ…はあ…はあ…ヤッベえ…」

天馬がどうして深夜の街を全力疾走している羽目になっているかというところ――

――警察に追われているからである。

だが、警察に追われているといっても天馬は犯罪を犯したわけではない。

考えてみれば分かるだろう。

天馬は高校一年生。

今は深夜の二時。

つまりは補導の対象である。

特に天馬が通っている私立の誠杏高校^{せいあん}は学力的には少し良いくらいなのだが、校則には異常に厳しい。少しでも破れば簡単に停学になってしまい、もし補導されてしまったのならば本気で退学を覚悟

しなければならぬ程の厳しさなのだ。

なら、その事を十分に理解している天馬はなぜこんな時間まで外を出歩いていたんだろうか？

もちろん校則を気にしてないわけではない。

理由は天馬の友人にあった。

天馬は夏休み最終日の一日前に――既に最終日になってしまったが――友人の赤羽鉄と水上葵と遊んでいた。

遊びの提案は一昨日、葵が電話でいきなり天馬に持ちかけてきたのだった。

「いやー。私さ、夏休み最後の日に予定が入っちゃったんだ。夏休み最後の日だよ？ テンション下がるよね。そう思わない？」

葵は愚痴をこぼす割りには楽しそうに話してきた。

それに対し、天馬は軽く聞き流すつもりで、

「そうだな」

と気の抜けた返事をした。

しかし、それは間違いだったのかもしれない。

天馬はなぜか電話越しであるにも関わらず、葵がまるで悪巧みを思いついた子供の様な笑みを浮かべている様子が頭の中をよぎった。

案の定、彼女はこう続けた。

「というわけで代わりに明日、一日中遊ぶから予定空けといてね！？」

「…えっ！？ ちょっと――」

「あ、てっちゃんも呼んで三人で遊ぶからね！　じゃあね」

といった具合に天馬は半ば強制参加という形で彼女の遊びに付き合うのが確定したのだった。

ちなみに「てっちゃん」と呼ばれていた人物は、赤羽鉄のことである。天馬も彼のことは「てっさん」と呼んでいる次第であった。

そして、天馬らは遊んだ。一日中どころか、日付が変わるまで：本当は天馬は遅くとも夜の十時には帰リたかった。鉄もあまり遅くまで遊ぶことに賛成していなかったのだが、葵によって、彼らが早く帰ることは叶はなかった。

葵は天馬と鉄が帰ろうとすると二人に向かって「今、帰るなら絶交だからね」や「今からカラオケ行ってくれないと、私、ここで泣くよ？」などといった子供の様な駄々をこねたため、二人とも困り果てた。

葵と鉄はあまり気にしていないのだが、彼らにとても、とても大きな恩を感じている天馬にとってはどんな些細なことであっても彼らの頼みなら喜んでしたいと思っている。

それはこのような子供じみた頼みでも同じであった。

そして今に至る。

天馬は細い裏路地に入り込むことでようやく警察を撒いたようだ。夜遅くまで遊んでいただけなのだが、おそらく、今、逃げ切れれば大丈夫だろう。

「本当に、撒けたよな？」

天馬は走るのを止め、歩いているが、警戒を解くことはしない。確かにこの様な時、警戒を解かないことは正解であろうが、今回に限っては、この時、この場に限っては間違いだった。

おそらく天馬はこの後、何も考えずに走り抜ければ良かった、と

思うことになるだろう。

警戒心があるということは周囲の物音や気配に敏感になり、些細なことに對しても反応してしまう。

そのことが災いした。

警戒しながら歩いている天馬は十字路に差し掛かろうとしていた。天馬は慎重に左右を見渡し、誰もいないことを確認できたため、そのまま直進しようとする。

その時だった。

——ガシャン。

「——ッ!!」

微かに東の方から音がした。おそらく、不良が椅子や机の代わりにしているドラム缶が転がったのだろうと思われる。

天馬はもう一度、恐る恐る音が聞こえた辺りを見渡した。

やはり誰もいない。

この裏路地は今でこそ不良の溜り場になっているが、数ヶ月前までは普通よりも少し細い道なだけであり、多くの人が使っていた。

そのため、ここにも街灯はいくつか設置されている。

だから数十メートル程の距離までなら人がいるか、いないかのくらしいの確認はできる。

そしてそこには誰もいなかった。

ここですぐに帰れば良かったのだが、天馬の頭には疑問が浮かんだ。できた。

…今日は風がない。人もいない。なら…なんで音がした…?

天馬の足は東の方に向く。

天馬自身、かなり怖がっているが、なぜか足が動く。

「……」

天馬は、二〇メートルほど進み、もう何度飲み込んだか分からないくらい飲み込んだが、もう一度ごくりと唾を飲み込む。

「……気のせいかな……」

そう思い、天馬は元来た道に戻ろうと思い、何気なく一歩だけ足を前に出して、方向転換しようとした。

しかし、何気ないその一歩こそが天馬の世界を変えた。

——いや、正確に言うなれば、天馬が「今まで見ていた世界」が変わった、であろう。

今まで天馬の前方は何もない、少し汚い道でしかなかった。

だが、今は違う。

何もかもが違う。

今、天馬が見ている光景は、今まで天馬が見ていた光景を、知っていた常識を否定しているように思えた。

目の前には、銀髪……いや、白に少し灰色が混じっている、そんな色合いの髪が腰の付け根まで伸びている、制服を着た少女と短い金髪にスーツを着た若い、二十歳前後の青年が向かい合っていた。

一方は浮世離れた少女、もう一方は新人ホストという印象であ

った。

二人とも服はボロボロになっており、身体のあちこちに傷があった。

青年の方に関しては右腕から決して少量とは言えない量の血が流れている。

さらに驚くべきことは道のあちこちが崩れていたことである。それはまるで銃撃戦……いや、ミサイルの打ち合いが繰り広げられていたのではないかと思わされる程の崩れ様だった。

一拍おいて、天馬は気づく。

——なんでこんなにはっきり見えるんだ？

そう：目の前の光景が変わった瞬間から、なぜか昼間のように物がはっきりと見える。

矛盾しているようだが、決して辺りが明るくなったというわけではない。

だが、それでも、この辺り一帯はなぜかはっきりと見える。

そのため目の前の二人の姿も分かったのだのだが：

「：なんなんだよ、これ」

ぼそり、と天馬の口からそんな言葉が漏れた。

バツツ！！！！

その言葉を発した瞬間。

天馬の前方にいる二人は彼の存在に気付き、少女は天馬の方に大きく振り向き、青年は顔は動かさずに視線だけ天馬の方に向けた。

「えっ！！」

少女は、天馬が今の状況に対する驚きと同じくらいの驚きを顔に表していた。

「…一般人？ どうして一般人が…？」

少女のそんな反応とは大きく異なり、青年は小さく笑みを浮かべていた。

「——っ！！！！ 結界が…壊されている…」

少女は空を見上げ、理解しがたいことを言っていた。

しかし、今の天馬にはそんなことを気にする余裕はなかった。

そして——

一瞬。

天馬は瞬きをした。

その一秒にも満たない時間で青年は移動した。

天馬の後ろに。

青年は自らの右腕を持ち上げることもできず、動かすことのできる左腕で天馬の喉元にナイフを突き付けていた。

「…形勢…逆転…ですね」

青年は少女に向かってそう投げ掛けた。

「動かないようにお願いします。さもないとこの少年を殺してしまいますよ」

「なっ！！？」

天馬は驚きを隠せない。いや、そうではない。隠せないのは、さらにその奥にある恐怖である。そう、後ろにそびえる本物の殺意に。

「無駄です」

灰髪の少女は、先程の驚いた表情から一転、感情が無いのかと思わせる程の冷めた声で言う。

「グロム・エオニオ先生。本当に逃げられるとお思いで？」

「思っていますよ。…今を逃げ切れれば、ですが」

——そして、それも今、可能になりました。

グロムは続けて言った。

『雷の理』ことわり

グロムがその言葉を発したのと同時にグロムの足元から電気が生まれた。

天馬は後ろで何が起こっているのかが分からないため、ただ、身体を強張らせていた。

そこでグロムは天馬の喉元に突き付けていたナイフを遠ざけた。

「すまなかったね、少年。私はここで失礼させてもらうよ」

「待ちなさいっ!!」

そして、グロムは優しい笑顔を残して消えた。

天馬が振り返ると、そこには誰もいなかった。

まるで雷いかずちのような速さで消えていた。

「…逃がさない」

少女は少し怒りという感情を込めた声で言い、そしてグロムを追跡しようと身体に力を入れた。

それと同時に——

——落雷が少女を襲う。

その落雷は普通の雷とは大きく異なっていた。
まず、その落雷は雲から発生したわけではない。そもそも今夜は雲一つ無いのだから。

なら、どこから発生したのか？

それは空高くに描かれている円形の図形から発生した。

そして、もう一つ。

それは一つの落雷が空から止むことなくずっと電気が流れ続け、少女を襲っていることだ。

「——ッ!!!」

天馬は目の前の光景にただ、ただ怯えていることしかできなかった。

落雷は未だ弱まる気配を見せることなく少女を襲い続けている。
もうそれは落雷と呼んでいいものなのかも疑わしいものである。
しかし、少女も異様だった。

異常だった。

少女はその落雷を両手で受け止めていた。

「そのあなたっ！　今すぐ逃げなさい!!!」

少女は天馬に向かって叫ぶ。

しかし、天馬の思考は働かない。そのため身体も動かない。動かそうとすることさえ考えられない。

「急いでっ!!!」

「…えっ!?　あっ…」

天馬の思考がようやく働きだす。

そして、走りだす。

全力で——

つい先程、警察から逃げていた時とは比べものにならない速さで

涙目になりながらも、ひたすら全力で――

少女は横目で天馬が離れていくのを確認した。

そして、再び感情の起伏が感じられない声を出す。

『消えろ』

少女がそう言った瞬間に落雷は――消えた。

さらに少女が立っている付近の道も一部消えていた。

「……申し訳ありません。完全に逃げられました」

その後、少女は場所を変え、どこかのビルの屋上で電話を掛けていた。

『そうかい。まあ、仕方ないのお。なんせ相手はグロム君だったのじゃから。それより、お主は怪我などはなかったのかの?』

電話の相手は声や話し方から推測すると、男の老人のようであった。

「はい。その点は問題ありませんが……」

『……? 齒切れが悪いのお。どうしたのじゃ?』

「……一般人に目撃されました。すみません。私のミスです」

『……ふむ。その者の身体的特徴等はどうか? 分かるか?』

「申し訳ありません。しかし、その者の落とし物らしき物は回収しました」

『それならば、その者を割り出すことも可能じゃな。それで? その持ち物とはなんじゃ?』

「財布です」

『うむ。ならば急いでこちらに転送してくれるかのお?』

少女はポケットの中から、先程拾った財布を取り出した。
その拍子に財布に入っていた一枚の写真が落ちる。

そこには天馬と二人の少年、少女の三人が写っていた。

「…ッ！！！！」

少女はその写真を見ると、目を大きく見開き、そのまま制止した。
「すみません。この目撃者の件は私が一人で動いてもよろしいですか？」

『？？ それは構わないのじゃが…どうしたのじゃ？』

「いえ、なんでもありません」

『…まあ、よい。以上で通信を切るぞ』

「はい、分かりました」

『うむ』

そうして通話が終わった。

しかし、少女が耳から携帯電話を遠ざけて、初めて分かったことがあった。

彼女の携帯電話には――

――電源が入っていなかった……

さらに、少女はそれが当たり前であるかの様にボタンを全く触っていない携帯電話をポケットにしまった。

そして、写真を優しく抱きしめて呟いた。

「……………ウル」

少女の頬には一滴の涙がこぼれた。

「はあ、はあ、はあ……ゴホッ、ゴホッ」

天馬はおよそ十分間ひたすら走った。

そのせいで、足腰に力が入らなくなり、おまけに咳までもが出てくる。

天馬のおじさんとおばさん——お父さん、お母さん、ではなく、おじさん、おばさん——は一昨日から海外におじさんの短期の出張にふたりで行っているためあと一週間程帰ってこない。

だから、家に入っても、音を消そうとはせずに自分の部屋に入り、大きな音を出してベッドに倒れこんだ。

本当なら風呂にも入りたいところなのだが、天馬にそのような余力はもう残っていなかった。

「……何だったんだ……アレは……」

天馬は瞼を閉じたのだった。

——今日のことは夢であった。

そう思って。

……そう思いたくて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0486z/>

白の皇帝《エンペラー》

2011年12月2日22時48分発行